

看護に携わる人たちのためのパンフレット閲覧サイト“全国版”

# ナスナス ナス ナス ガイド de ガイド

創刊号 年 2 回発行

**FREE**  
ご自由に  
お取り下さい

nas nusガイドスタッフが選んだ

全国**51**病院情報

これが、本当にあった現場ストーリー

ナース実語録

医療法人社団 祐和会 長尾クリニック  
長尾Dr.コラム

看取り人 訪問看護こそ  
看護の原点



面接で急な質問に答えられますか？  
「結婚は何歳ぐらいでしたいですか？」

予想外な質問への対策方法

気になる先輩ナースのお金の事情を覗き見  
リアルな生活実態を大解剖！

1年間で**200万円**  
貯めたナース



## 往診もする下町の開業医

看護学生のみなさん、こんにちは！僕は兵庫県尼崎市という下町の開業医です。外来診療の合間に、在宅患者さんを往診しています。「在宅医療」といえば、「末期がん」を連想される方が多いでしょう。

しかし現実には「がん以外」の患者さんのほうが格段に多いのです。その理由は簡単です。末期がん患者さんの平均在宅期間はわずか1ヶ月半ですから、いくら患者数が多くてもあつという間に在宅医療が終わってしまうのです。

一方、「認知症」に代表される「がん以外」の病気の在宅医療は、しばしば年単位に及びます。だから在宅患者数は、いつも「がん以外」が多いのです。

しかし「在宅看取り数」で見ると、やはり「がん」患者さんが多くなります。超高齢化社会を迎え「がん」も大切ですが、「がん以外」の在宅医療も負けず劣らず大切になってきました。病院とは本来、病気を治すところです。そこでは病気の初期像や慢性期を主に診ます。

一方、僕たちが在宅医療者は、すべての病気の終末期像を診ています。人間は最終的にどのような経過を経て死に向かうのか、訪問看護師さんたちと時には泣き、そして時には笑いながら対峙する毎日です。

## 自宅は世界最高の特別室

勤務医だった時に、ある末期がん患者さんに「先生、家に帰りたい。往診してくれませんか？」とせがまれました。上司に尋ねると「病院からの往診は禁止されているからダメだ」でした。そう告げた深夜、その患者さんは病院の屋上から飛び降りました。

その無念さこそ僕が開業医、すなわち往診できる身分に転身したきっかけです。開業して間もないころ、毎日肝臓の注射に来てくれていた患者さんの体力が徐々に低下し、ある日来られなくなりました。暇だったので、その患者さんご自宅に往診して点滴をするようになりしました。その2ヶ月後、そのまま最期を迎えました。余計な延命処置をしないのが功を奏したのか、ほとんど苦しまない自然な最期でした。

病院では全員が吐血したり、管だらけになつて最期を迎えていましたから、「一体この差は何なんだろ？」と感じました。この患者さんが、当院の第1号在宅患者さんでした。

病院から家に帰った患者さんは、食べるようになり痛みも多少和らぎます。自然経過に任せ余計な延命処置をしないと、ほとんど苦しみません。末期がんという、体中に何本ものチューブを入れられている姿を想像しがちですが、在宅医療の世界はそのようなスパゲッティ症候群とは無縁です。

そして400人以上をご自宅で見取るうちに「自宅は世界最高の特別室」であると確信するようになりまし。

## 死は敗北ではない

医学は、生の延長を目標に発展してきました。だからどうしてもQOL(生活の質)や緩和医療を忘れがちです。終末期患者さんにとって大切なことは「あと何日生きられるか」ではなく、



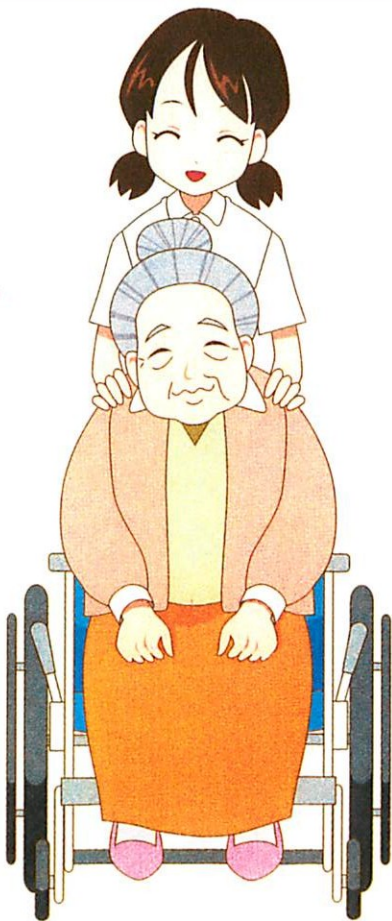
長尾 夕三ツク (兵庫県尼崎市) 院長

長尾和宏

nasnusガイドdeガイド 特別コラムVol.1

# 看取りびと

## —訪問看護こそ看護の原点—



「残された時間をいかに苦痛なく家族と楽しく過ごすか」です。

死は敗北ではありません。

僕のクリニックには、全国から医師や看護師さんなどが在宅医療の研修に来られ、一緒に患者さんを訪問します。すると医師や医師の卵は必ずこう言います。「こんなに悪いのに何故入院しないのか？」と。医療者自身が「死ぬ場所が病院である」と思いこんでいるのです。

本来、病院は病気を治すところで死ぬ場所ではありません。終末期は、緩和医療を重視する施設ホスピスや在宅ホスピスが適しています。現在、がん患者さんの在宅看取り率はわずか約8%です。50年前は90%、もつと昔は100%でした。

## 看取りびと 訪問看護こそ看護の原点

在宅医療の主役は、医師ではありません。ズバリ、訪問看護師さんです。

昨年、アカデミー賞を受賞した映画「おくりびと」には、在宅での最期が納棺師という仕事を通じて美しく描かれていましたが、そこに医療者の姿は一切ありませんでした。しかし実際には、訪問看護師さんが患者さんと介護者にピツタリ寄り添っています。

訪問看護師さんこそ「看取りびと」なのです。在宅医療には高度な知識と経験が要求されるので、一定期間、病院での厳しい修行が必須です。

在宅での患者さんと看護師の距離は非常に近いのです。そしてその分、大きなやりがい、喜びがあります。

僕は「訪問看護こそ看護の原点である」と確信しています。

看護学生のみなさん、こんな素晴らしい仕事である「訪問看護」に、是非いつか辿り着いてください！

全国の多くの在宅患者さんが待っています。

## ▲長尾和宏プロフィール▼

東京医科大学を卒業後、大阪大学第二内科に入局、勤務する。市立芦屋病院での勤務医時代に阪神大震災を経験、その後開業への意志が徐々に強まり、平成7年に兵庫県尼崎市にて長尾クリニックを開業。

現在はクリニックでは珍しい複数医師体制をとり、常勤6名、非常勤2名の医師チームで、予防医療から在宅医療まで年中無休で活動する。

昨年にはドクターズブログ「医師・医者人気ランキング」で1位となり、「町医者力」や「パンドラの箱を開けよう」など執筆も多く手掛ける。